

国語(中)部会研究計画

I. 研究主題

主体的な思考・判断・表現を伴う学びの創造
～記述と対話を中心とする言語活動の深化をめざして～

II. 研究目的

1. 研究の経過

2016・2017年度は、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視して授業を改善していくために、研究主題を「思考・判断・表現の力を育てる授業の創造～主体的・協動的に課題を解決する言語活動の工夫を通して～」とし、どのような言語活動を位置づけることが効果的なのか、身に付けるべき力を用いて、それらの使い方を考え、主体的あるいは協動的に活動できることで達成できる学習活動とは、どのようなものなのか、といった視点で研究を進めてきた。

2018・2019年度は、前年度までの研究成果をさらに充実させるために、「主体的な思考・判断・表現を伴う学びの創造～指導のねらいを明確にした授業を通して～」と主題を設定した。生徒の思考力・判断力・表現力をより向上させるためには、私たち教員が単元において生徒に身に付けさせたい力(指導のねらい)をより一層明確にした授業にしていく必要がある。教員個々による教材研究や授業実践を進めるとともに、公開授業・研究討議等の共同研究をさらに充実させ、深めていくことをねらいとした。

2020・2021年度も引き続き、「主体的な思考・判断・表現を伴う学びの創造」という主題を深めることを目標とし、「記述と対話を中心とする言語活動の工夫を通して」というサブテーマのもと、協働研究を進めてきた。第二次研究協議会においては様々な制限がある中、授業者の先生方から大変有意義な示唆をたくさん頂き、レポート交流においてはICT機器の活用を積極的に進めている例も数多く報告して頂いた。そこで、2022年度もさらなる研究の継続と深化をめざし、子どもたちが主体的な思考・判断・表現力を身につけるために、個人の思考する時間・他者との対話を通して意見を交換する時間を授業の中に位置づけていきたい。

2. 主題設定の理由

2021年1月の中教審答申によると、これからの時代は「Society5.0」と呼ばれる、社会の在り方が劇的に変化する時代を迎えており、近年の情報化やグローバル化といった社会の変化が、加速度的に進展し、より複雑で予測困難な状況になっていくであろうと捉えている。

このような時代だからこそ、子供たち一人一人が、予測できない変化に対して前向きに向き合う必要がある。そして、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生社会のあり方を考え、試行錯誤しながら、問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、持続可能な社会の創り手となっていくことができる力を身に付ける必要がある。そのためにも、学力の三要素【基礎的・基本的な知識・技能、知識・技能を活用して課題を解説するために必要な思考力・判断力・表現力、そして、主体的に学習に取り組む態度】のバランスのとれた育成や言語活動の充実を図ることが重要である、としている。

我々、教員は、そのための一つの手段として、「生徒の主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を活性化していくことが重要である。授業においては、今後も、単元や題材のまとまりの中で、子供たちが「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていく必要がある。

このような視点を持って授業改善を図ることが、子供たちの学びに向かう主体性や思考力・判断力・表現力を育てることにつながるはずである。

3. 研究仮説

記述と対話を中心とする言語活動の工夫を通して、確かな言葉の力(思考力・判断力・表現力)を育てることができる。

III. 研究内容

1. 教科書教材についての実践研究

(1) 記述と対話を中心とする言語活動の設定

- ・生徒の実態を把握し、指導のねらいを明確にした上で、その力の育成に有効な言語活動を検討する。
- ・身につけさせたい力の育成を図るために必要な学習要素を単元を通しての指導計画に適切に位置づける。
- ・単元を通して生徒がねらいとする力を身につけることができたか、見取ることを意識する。

- ・生徒自身にも活動を振り返らせて、身についた力を意識できるようにする。
- ・実践の成果と課題を明らかにする。
- (2) 教材の指定はしない。
- (3) ICT機器の積極的な活用を図る。

2. 教科書教材以外についての実践研究

- (1) 記述と対話を中心とする言語活動の工夫を行い、授業者の授業構想力を高める実践に取り組む。
- (2) 学習の基礎となる言語能力を高め、言語感覚を豊かにするための実践に取り組む。
- (3) 優れた教材の開発に取り組む。
- (4) ICT機器の積極的な活用を図る。

3. 理論研究

国語教育を取り巻く現状や課題について学び、課題解決の方策の手がかりを得ることで、直面する課題に対応する教師の力を高める。

4. 教育課程研究

2018年度に基底編、2020年度に展開編を作成した。今後はそれらを活用し、研究主題の解明に努められるよう、必要な調査や資料収集、研究等を行う。

IV. 研究方法

1. 地域サークルでの研究推進

- (1) 各市町村単位で地域サークルを組織し、推進委員を中心に地域単位での共同研究を行う。
- (2) 「研究計画（内容）」を市町村単位で明確にし、研究主題解明に向けた研究実践を積み重ねる。
- (3) 成果と課題について、地域サークルで議論を行い、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。

2. 石教研第二次研究協議会

- (1) 中心サークルによる公開授業と授業についての研究協議を行い、成果と課題を明らかにする。
- (2) レポート交流などを通して各市町村における共同研究の発表・交流を行う。
個人レポートについては研究内容に則したものを原則とするが、部会員の研究に資するものであればそれ以外の内容も可とする。
- (3) その他の詳細については研究推進委員会において検討し、市町村の研究協議会や部会便りを通して全部会員の共通理解を図る。

3. 各種研修会

研究主題解明や指導技術向上のために、理論と実技を伴う研修会を実施する。部会の研究主題解明に資する内容で、国語教育の喫緊の課題について適切な講師を招き、指導実務の技術向上を目的とした内容で行う。詳細については研究推進委員会において検討する。

4. 部会情報「一語一会」の発行

日常実践の交流や研究資料の提供を行うため、事務局は年4回の部会情報発行を行う。

5. ホームページの更新

研究成果の発信や部会員の交流などのため、ホームページの更新・充実に努める。

6. 教育課程委員研修会

石教研第二次研究協議会での実践交流を踏まえ、教育課程編成・改訂のための資料整備に当たる。

V. 研究体制（組織）

1. 地域サークル

- (1) 推進委員を中心に研究の推進を図り、各学校の研究責任者ととも「学年別」の研究センター（授業者）を選出するなど、共同研究の体制を作る。
- (2) 授業公開をもとに、日頃の研究実践を交流し、主題の解明を図る。

2. 中心サークル

- (1) 中心サークルは石教研第二次研究協議会における会場（授業・全体）を受けもち、研究の視点に基づい

て学年別を原則に授業を公開する。

- (2) 2022年度を中心サークルは「千歳」となる。次年度以降は、千歳→恵庭→北広島→石狩→江別の順で進める。

3. 研究推進委員会

部会役員と各市町村推進委員で研究推進委員会を組織し、研究計画の具体化、研究成果の集約、石教研第二次研究協議会の運営等について研究協議する。部会役員は部長1、副部長1、事務局長1、事務局次長1、研究員1、教育課程委員3の8名とする。なお、研究の継続と深化を図るために、部会役員と各市町村推進委員の任期を原則2年とする。

VI. 年間計画

月	各種研究協議会・諸会議	役員会・推進委員会	具体的研究活動	その他の活動
4月	石教研第一次研究協議会 各市町村研究協議会	本年度研究の提案・説明	研究計画に基づく個人研究の立案	
5月	研究推進委員研修会	具体的計画・準備		部会便り①発行
6月	千歳市専門部会研修会		研究実践①	部会便り②発行
7月	理論実技研修会	計画・準備・運営		
8月	研究推進委員研修会	計画・準備・運営		
9月	各市町村専門部会研修会	計画・準備・運営	市町村サークルでの中間交流 研究実践②	部会便り③発行
10月	事前研修会 石教研第二次研究協議会	計画・準備・運営	研究成果と課題の全体交流	
1月	研究推進委員研修会	本年度研究の総括 次年度計画策定		部会便り④発行
2月	各市町村研究協議会	次年度研究体制作り 次年度計画協議		
3月			研究のまとめ	

(文責 井上 智裕)